

# 社会貢献者表彰とは

国の内外を問わず、社会と人間の安寧と幸福のために貢献し、顕著な功績を挙げられながら、社会的に報われることの少なかった方々を表彰させて頂き、その功績に報い感謝することを通じてよりよい社会づくりに資することを目的とする。

## 第51回社会貢献者表彰の概要

### 【募集告知】

2018年2月より、ダイレクトメール発送、新聞への告知広告、当財団ウェブサイト等にて。

### 【対象となる功績】

- 人命救助の功績
- 社会貢献の功績

### 【候補者について】

- 候補者には、年齢・職業・性別・信条・国籍等の制限はない。
- 日本で活動する方、もしくは海外で活動する日本人を対象とする。
- 候補者は、同種の功績により当財団の「社会貢献者表彰」を受賞されていない方とする。
- 候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒賞）または、大臣表彰等を受賞されている方は、選考の際、後順位とされる。
- 「人命救助の功績」については、原則として、2017年1月1日以降の功績を対象とし、この功績の場合のみ、当該行為により亡くなられた方を含む。

### 【選考について】

選考委員会開催日：2018年6月11日 帝国ホテル東京 126件から41件選出

### 【受賞者】

受賞者：40件（人命救助の功績：8件 社会貢献の功績：32件）

### 【表彰式】

開催日：2018年11月26日 帝国ホテル東京

受賞者には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）を授与する。

# 受賞者手記目次

---

## 【人命救助の功績】

鈴木 隆彦	032
日原 拓哉	034
上田 芳賢	036
石井 幹人	038
鈴木 雄介	040
山口 峻	042
竹澤 匠平	044
池田 光広 池田 結人 池田 恵菜	046

## 【社会貢献の功績】

早大防災教育支援会（WASEND）	050
特定非営利活動法人チェンジングライフ	052
認定 NPO 法人高知こどもの図書館	054
牧野 博子	056
岩田 亮子	058
むつみ日本語学校	060
認定 NPO 法人こどもの里	062
若松地区町会連絡協議会「若松地域給食ボランティア」	064
大谷 順子	066
山口 和宏	068
更生保護法人栃木明德会	070
更生保護法人呉清明園	072
京都府更生保護女性連盟	074

関西生命線（台湾語・北京語によるいのちの電話）	076
NPO 法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾	078
特定非営利活動法人おかやま入居支援センター	080
NABA（日本アノレキシア・プレミア協会）	082
森口 エミリオ 秀幸	084
サンパウロ社会福祉法人救済会「憩の園」	086
認定 NPO 法人 NGO ブラジル人労働者支援センター	088
横井 敦子	090
認定 NPO 法人ゆいネット北海道	092
特定非営利活動法人人身取引被害者サポートセンター ライトハウス	094
認定特定非営利活動法人被害者支援ネットワーク佐賀 VOISS	096
特定非営利活動法人わたりグリーンベルトプロジェクト	098
認定特定非営利活動法人みやぎ発達障害サポートネット	100
石巻復興きずな新聞舎	102
公文 和子	104
小松 みゆき	106
特定非営利活動法人キッズドア	108
ひろはた自習・相談室	110
笠原 五郎	112

# 人命救助の功績

---

- ▶ 海難、水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた功績
- ▶ 犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- ▶ 災害、事故、犯罪の発生を未然に防いだ功績

## 鈴木 隆彦



東京都

2017年5月17日0時06分頃、京王線桜上水駅の踏切内で、車イスから横転し動けなくなった高齢男性とその車イスを押していた高齢男性の2人を、たまたま通りかかった地元消防団に所属する鈴木隆彦さんが発見した。その時、遮断機が下り始めたため、鈴木さんは「助けなければ!」との思いで踏切内へ入り電車が迫り来る状況下で、動けなくなった男性を抱えて踏切外へ救出した。

鈴木さんが助けた男性は失禁していたが、自身の衣服が汚れることも意に介さず抱きかかえた。

(推薦者：林田 智樹)

現在、私は日本赤十字社災害時支援ボランティア、東京消防庁災害時ボランティア、地元社会福祉事業等に積極的に参加し、2020年東京オリンピック、パラリンピックでさらなる社会貢献ができるよう、日々精進しております。

さて、話を戻しまして、

その日は、深夜に近所の店に向かう途中でした。京王線桜上水駅の踏切は5車線、25mあり、夜中とは言え電車の行き来が絶えない所です。いわゆる都内でも有数の「開かずの踏切」と呼ばれています。

私が踏切を渡ろうとした時、前方、踏切中央付近で老人を乗せた車椅子が転倒し、その車椅子を押していたもう一人の老人もパニック状態で必死に車椅子を起こそうとしていました。

開いた途端に警報機が鳴って閉まってしまうような踏切で、電車が見えているのも忘れて無我夢中で車椅子に走り寄り、なんとか倒れていた老人を抱えて踏切を押して外へ運び出しました。それを見た通りがかりの2名の方が踏切の反対側から入ってきてくれ、車椅子を押していた男性と車椅子を無事、踏切の外に押し出すことができました。

倒れていた男性は、意識はありましたが恐怖の為か失禁しており、私は着替えるためにその場を去り、帰宅してしまいました。

後日、電鉄会社の防犯カメラによりこの事実が一部始終確認され、京王電鉄管区長から、事故を未然に防いだ功績で表彰されました。思い返せば、あの時は危険を顧みている余裕もなく、行動が先走ってしまいましたが、まずは電車に知らせる非常停止ボタンを押すべきでしたし、110番、119番通報もするべきだったであったと反省しました。

救助された男性がどなただったのか、救助を手伝って下さった方々のお名前すらわ

かりません。昨今では個人情報保護のためわかっていても教えないもののようにですが、今回の表彰にあたり彼らも同様の貢献をしたことを一緒に喜べなかったことが唯一、残念でなりません。

再三ですが、今回は貴重な機会を頂き、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



▲現場となった踏切

## 日原 拓哉



山梨県

2017年11月29日午後8時頃、山梨県甲府市後屋町の後屋団地の1階で火災が発生した。管理人から火災が発生した、と助けを求められた日原さんは、消火器を持って火元である真下の男性宅へ駆け下りた。男性は一人暮らしだったが、足が不自由で車椅子を利用していた。

日原さんは消火器を噴射して煙を払うと、男性を背負って屋外へ救出した。その後、上階の住人が階段を下りてきたが、炎と煙に阻まれて取り残されており、4階踊り場にもまだ数人の姿が見えた。日原さんは、外壁の排水管パイプをよじ登って、上階の住人を避難誘導し、2階踊り場からは、排水パイプにつかまりながら一人ずつ抱えて、下にいる家族と連携して計8名を救出した。消防車が到着したときには住人の救出は完了していた。

火の勢いはかなり激しく、現場が団地であったため、多くの犠牲者が出る可能性があり、一人の怪我人も出さずに救出できたことは驚きであり、警察官から見ても勇気が必要な行動であり模範としたいという言葉があった。県警や消防署、警察庁長官、総理大臣からも表彰され、春には紅綬褒章も授与された。

(推薦者：山梨県教育委員会)

今回の受賞は、私のような者が受けて良かったのか、今でも疑っています。ただ人を助けるという、人として当たり前のことをしただけで受賞してよいものなのかと、毎日のように思っています。しかし、あの火事で私が行ったことで間違っていると思った日は一日たりともありません。今では、自分にしか出来なかったことなのかもしれない、そう思うようになりました。

私の行動がひとつでも違っていたら、皆助からなかったかもしれないのと、私の命もあったのかどうかと、考えたりしました。

無我夢中で駆け抜けたあの瞬間は、今でも覚えているし、私の人生に大きな影響を与えています。私ひとりの力では到底成し得なかったことだと思います。

あのとき助けを求められていなかったら、あのとき家に帰っていなかったら…全てが偶然のようだけど必然だったような気がします。

そして今日の受賞で私を推薦してくださった方々や家族に感謝しています。



**甲府・団地火災で8人救助  
日原さん(華僑)に感謝状  
火元男性を担いで外へ**



切刀康友署長から感謝状を受け取る日原拓哉さん(左)  
—南甲府署

南甲府署は5日、甲府市後屋町の市営団地の火災で、火元の男性(70)を担いで連れ出すなど8人を救助したとして、華僑・高3年の日原拓哉さん(18)に感謝状を贈った。

火災は11月20日午後7時50分ごろ発生。鉄筋コンクリート5階建ての1階の部屋から出火し、その部屋と真上に住む日原さん宅の2部屋が全焼した。

同署によると、火災当時、日原さんは家族4人と在宅中で、火災の連絡を受けて消火器を持って火元の男性の部屋に駆け下りた。男性は1人暮らしで、足が不自由なため階段から車いすを使っていたという。日原さんは消火器を噴射さ

せて煙を払い、男性を背中に担いで屋外に助け出した。

また、5階から階段を下りてきた小学生や高齢者7人が、煙と煙に囲まれてる階の踊り場に取残されていたが、外壁に設置されているパイプを使ってよじ登り、下にいる人と連携して救助した。

同署で贈呈式が行われ、切刀康友署長が日原さんに感謝状を手渡した。日原さんにはまだ、団地ではどんな人が住んでいるか把握したまで、口頭から何かなれば助け合おうと話していたという。日原さんは「無我夢中だったけど、無事助けることができてよかった」と話していた。(岡澤也)

掲載日: 2017年12月06日 / 地域 / 紙面頁024  
紙面・記事・写真・イラスト等の無断転載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社



## 上田 芳賢



熊本県

2017年8月20日午後4時半頃、知人の運転する車で、現場の踏切を通過しようとしたところ、既に遮断機が下りた踏切内の線路際に高齢男性が自転車とともに倒れて動けなくなっているのを発見した。

知人は119番通報し、助手席にいた上田さんはすぐに降車し、線路内の自転車を踏切の外へ運び出し、男性の救助へ向かった。男性は頭を打っているようで、意識朦朧とした状況で、上半身が線路内にある状態で横たわっていた。体が持ち上がらず、上田さんは老人の足を持って線路の外へ引きずりだしたところで、電車は上田さんたちに気づくことなく、減速することもなく、間一髪通り過ぎていったが、二人とも電車との接触もなく無事に救助は成功した。

ちょうど付近を通りかかった30代の若者の加勢もあり、電車通過後、改めて安全な場所へ老人を移動させ、救急車の到着を待った。電車と接触してしまいかねなかった切迫した状況の中で、躊躇することなく救助にあたった上田さんの功績は大きく、熊本警察本部長からの感謝状も贈られている。

(推薦者：公益財団法人警察協会)

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の人命救助の功績に決定いただき、表彰式典に御招待いただき誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

受賞の事案につきましては、式典の「しおり」にも紹介されていますが、昨年8月20日午後4時半頃、偶然通りかかった踏切内に自転車と共に倒れている負傷者を発見、遮断器も降り警報器も鳴っている中、一刻も早く負傷者と自転車を線路外に出さないと大きな事故になると思い、迷う事なく線路内に入っての行動でした。

幸い救出の直後に、何事もなかったかのように列車が通過して行きました。その後更に、負傷者を安全な場所に移し、救急車が来るのを待って警察官と救急隊員に事情を説明しました。負傷者は病院へ搬送され、治療されたそうです。後刻、家族の方が訪問され、怪我も軽傷で済み、命拾いをしたとの話をされ感謝の言葉を受けました。

私自身は当然の事をしたと思っていましたが、後日、熊本県警察本部長の表彰を受け、本年11月、長洲町より善行功労者としての表彰も受けました。

15年間毎朝、小学生を学校まで送り届けるボランティア活動を続けているので、危険や事故に対応する感覚はもっていたつもりでしたが、いざこのような状況に直面すると身体がすくむものですが、助けなければと思う一心での行動であったと思います。

今回、若い頃働いていた東京へ行くのは、40年振りの事で不安もありましたが、歴史と伝統ある社会貢献支援財団からの栄えある式典への御招待でもあり、身にあまる光栄でもあるため、同行する関係者、友人の勧めもありまして、お世話になる事に致しました。

前日の懇親会と夕食会では、さすがにすばらしい帝国ホテルの設備と料理、同じテー

ブルの受賞者との交流と他テーブルの同郷の人たちとの交流や会話もでき有意義なひとときでした。

また、表彰式当日は、安倍昭恵会長とのツーショット撮影や会場の広さ、豪華さ、多くの参加者、美味しい料理など驚くばかりでした。

表彰式典では、首相夫人でもある安倍会長より表彰状を直接授与されたときは、さすがに緊張でふるえを感じました。

同行した3人は、たびたび上京していましたが、私自身は若い頃働いていた渋谷、新宿、中野に立派な高層ビルが建ちならんだ変化に驚くばかりでした。ただ、唯一、渋谷の道玄坂で昔転んだことを思い出して、同行者と一緒に笑いました。その後、新豊洲市場や築地の場外市場にも廻り散策し、すしを食べて一生の思い出となる3日間を過ごしました。

総てが財団からのご招待があったからこそと感謝し、心から厚くお礼申し上げます。社会貢献支援財団の益々の御発展と御活躍を、そして関係する皆様の御多幸、御健勝を祈念しましてお礼のことばと致します。



▲当日の様子を説明する上田さん



▲現場の踏切



▲防犯パトロール中 子どもたちの見守り

## 石井 幹人



新潟県

2018年3月30日、午後9時15分頃、石井氏は仕事から自宅に帰ったところだった。しばらくするときな臭く、焦げたような臭いがするので、外に出てみると自宅から40～50メートルの距離にある町内の女性宅の家の2階部分から火が出ていた。

携帯電話で119番通報をしながら駆け付けると、1階部分は煙は出ていたが、火は見えなかった。玄関の戸を叩き、まだ中に人がいるか確認してみると、うめき声のようなものが聞こえたが、それは直ぐに聞こえなくなってしまった。そこでやむを得ず、玄関の鍵の部分のガラスを割って、中に入った。

すると玄関の隣の部屋のソファに放心状態の女性が横たわっていて、しゃべることも出来なかった。立たせることも背中に背負うことも駄目で、その間に火は1階部分のカーテンや障子に移り、周りが真っ赤になった。

無我夢中で普段では考えられないような力が出て、女性を抱え上げて外に出した。

救出後3～4分で消防車、救急車、パトカーが来た。すぐに消防車が放水を始めると同時くらいに、全体に火の回った家は崩れ落ちた。

救助された女性は救急車で病院に収容され、無事であった。石井氏は玄関戸の割れたガラスで足を切り、3週間程通院したが無事であった。

### 【受賞に至った経緯】

普段の私は、新潟県五泉市という街で、行政書士などの資格を活かした業務を行っています。事件当日は、仕事が終わって自宅でシャワーを浴びて髪を乾かしていた時でした。しばらくすると、何やらとても焦げ臭く、何かが燃えている匂いがしてきました。気になり台所や火を扱うような場所を確認しましたが異常はありませんでした。しかし、焦げの匂いが更に強くなってきたので、懐中電灯の代わりに携帯電話を持って家の外の確認に出てみると、今回の事件現場の方が真っ赤になっており、直ぐに火事だと分かりました。

急いで現場に走りながら消防署へ連絡し、消防車の要請を行いました。現場は2階部分が燃えており、階下はまだ火の手が届いていなかったため、直ぐさま住人の安否を確認する為、玄関の戸を叩いて大声で呼びかけを行いました。戸を叩くと、叫び声のような声と建物が軋んで壊れていく音が聞こえましたが、一向に住人の方が出てくるような状態ではなく、やむを得ないと判断し、施錠されていた玄関のガラス戸を叩き割ることにしました。

玄関から居間に移ると障子戸やカーテンといった回りの物があつという間に燃えていくような状況で、住人の女性はソファで動けないような状態にありました。直ぐさま女性をソファから抱えて連れ出し、何とか屋外に避難したものの、その場所も余りの熱風で、火傷しそうでした。この時、我にかえり、改めて火災の恐怖を覚えめました。

その後、消防車や救急車などが到着し、女性を本当に安全な場所（病院）へお連れできて良かったと思います。

【式典に参加して】

何よりも式典で思ったのが、各々の受賞者の経歴、貢献活動を拝聴すると、実に容易ならざる、大変な活動を行ってこられたのだと痛感させられました。自分の人生をかけてその貢献活動されてきた方、国内のみならず海外でも活動をおこなう方、自分自身の命を顧みず社会貢献を行う功績は実に感服するものばかりでした。そのような経歴の方々と肩を並べさせて頂き表彰を受賞するのは、とても誉れ高いものだと思います。

式典では、受賞者同士の交流が行われ、各々の活動や情報交換などの親睦が図られ、とても楽しい時間となりました。おかげで、受賞者や関係者同士での交友も深まり、大変よい思い出となりました。重ねてお礼申し上げます。

最後になりましたが、このような名誉ある式典の開催こそが、また次へ担う社会貢献活動への原動力になるものだと思います。

どうもありがとうございました。



▲駆けつけた時の火災現場



▲家の中に入った時の様子

**無我夢中火中の女性救助**

五泉市横町で3月30日深夜に住宅を全焼した火災で、住人の女性(41)を消防車の到着前に救出した。五泉市横町で3月30日深夜に住宅を全焼した火災で、住人の女性(41)を消防車の到着前に救出した。

たとして、同所の行政書士石井幹人さん(39)が24日、五泉市から表彰された。社会福祉士

**五泉の石井さん 市が表彰**

でもある石井さんは自らから独学で人命救助を学び、「助け出せるのは自分しかない」と思っただ。義務感で自然に体が動いた」と話した。

火災当時、自宅にいた石井さんは、焦げたにおいがあるのに気付いて外出したところ、女性宅から「女性を外に出さなければ」と無我夢中だった。火が迫っていて、普段は考えられないような力が出た」と振り返る。

24日の贈呈式で伊藤勝美市長は「危険な状況での救助で、勇気ある判断だった」とたたえた。

仕事に取り組み中で、高齢者や障害者支援に関わることが増えたため、2013年に社会福祉士の資格を取得。応急処置法にも興味を持ち、自動体外式除細動器(AED)の使い方を自分で勉強を続けている。「心構えができていたことが、救出につながったのかもしれない」と語った。

新潟日報

## 鈴木 雄介



宮城県

2017年9月22日21時30分頃、22名が乗車した高速バスが、宮城県のJR 仙台駅前から古川方面へ向かい、東北自動車道の下り線を走行中、三本木インター手前に差しかかった所で、道路の中央分離帯にバスの右側面から接触しながら走行を続けた。

バス内の通路を挟み最前列の左側のシートに公務員の男性 A 氏（推薦辞退）、同右側に鈴木氏が着席していたところ、運転手が運転席で後ろにもたれるようにぐったりするのを見た A 氏は、運転席に咄嗟に移り、運転手の膝の上に腰掛けるようにして座りハンドルを支えた。同時に鈴木氏も運転席に駆け寄り、ハンドブレーキを引き、バスを路肩に停車させた。

運転手は病院に搬送されたが死亡。二人の咄嗟の行動により乗客は全員無事で、重大な交通事故になるところを未然に防いだ。

このたびは第51回の社会貢献者表彰式典に参加させて頂き、ありがとうございました。

歴史ある式典において人命救助の功績として表彰されたことは驚きと喜びでいっぱいです。私は高速バスに乗車中、運転手が意識を失い、同乗していた乗客と協力してバスを止め、事故を未然に防ぎました。

通勤で毎日使用している高速バス（宮城県仙台発古川行き）に乗車中に事故が発生しました。あと3～4kmで降車という地点で、徐々に速度が落ち始め「あれ？減速のタイミングが少し早い？」と感じ、窓の外に視線を移すと中央分離帯が目の前に見えて「えっ！？」と思った直後「ドン！」という衝撃とともにバスは中央分離帯に接触しました。

その直後、同乗者と協力し、私は咄嗟に運転席に駆け寄り、2、3回運転手に声をかけましたが全く反応はありませんでした。ハンドブレーキを操作し同乗者と無事にバスを停車させることができました。高速道路の路肩に停車後、救急要請と発煙筒を使用し緊急対応をしました。

救急車が到着するまでの間、乗客と手分けをして運転手の心臓マッサージ等の救命対応に努めました。夜間で雨の降る中、高速道路での事故ではありましたが、乗客に怪我や二次被害も無く無事に帰宅することができました。今後も社会に少しでも貢献できるようにこれからの生活に活かしていきたいと思いました。

運転手の方は救急搬送されましたが、後日亡くなられたと伺っております。

御冥福をお祈りいたします。



河北新聞 2017年(平成29年)10月5日(木曜日) みやこ A(20)

# 機転と行動力たたえる

## 県警高速隊 バス乗客に感謝状

運転士の異変に気づき高  
速バスを安全に停車させた  
として、県警高速隊は4日、  
仙台市青葉区の東日本高速  
道路仙台台管理事務所で、い  
ずれも大崎市三本木、公務  
員小高孝志さん(57)と会社  
員鈴木雄介さん(45)に感謝  
状を贈った。

県警によりますと、2人  
は9月20日夜、ミヤコーバ  
ス(仙台市)が運行する仙  
台駅副発三川営業所行き  
の高速バスに乗り、午後9時  
35分ごろ、大崎市三本木伊  
賀の東北自動車道下り線  
で、男性運転士の異変に気  
付いた。小高さんはハンド  
ル、鈴木さんはハンドブレ  
ーキを操作してバスを路肩  
に停車させ、事故を未然に  
防いだという。

バスには22人が乗って  
いた。高橋誠高速隊副隊長は  
「重大事故につながる可  
能性があつたところの機転

と行動力をたたえた。運転  
手は搬送先の病院で急性心  
筋梗塞による死亡が確認さ  
れた。

「危を感じての直感的  
な判断だった。重大事故に  
ならず良かったと小高さん  
えめに喜んだ。

東北運輸局も同日、2人  
に感謝状を贈った。



県警から感謝状を贈られる小高さん(右)と鈴木さん(右から2人目)

## 山口 峻



熊本県

2018年2月18日(日)の午前11時30分頃、通っていた熊本県荒尾市の自動車学校から帰る途中、学校の前の交差点で3台の軽自動車絡む自動車事故を目撃した。

信号を無視した1台が他の車に接触、横転するのを見た山口氏は、自動車学校に戻り、警察と消防署に連絡を依頼するとともに、横転している車のガラスが割れた後ろの窓から車内に入り、シートベルトを着けたまま宙づりになっていた男性を車外に引っ張り出し救出した。

すぐにパトカー、消防車、救急車が到着、救出した男性は収容され無事であった。

なお、同氏は高校1年時に自宅近くに出血して倒れていた女性を救出し、同3年時の昨年12月には、バイクに乗った女性が転倒した事故に遭遇し、この女性を救助している。

先日は社会貢献者表彰式典に参加できまして、本当に感謝しています。

今、ここに私がいて良いのだろうかと思いました。

2018年2月18日(日)の午前11時30分頃、通っていた自動車学校で路上検定の試験を終えて帰る途中に、合計3台絡む大変な事故を目撃しました。

自動車学校のすぐ前の信号機付きの交差点で(以前から危ない交差点です)南方面から来るとS字カーブのなだらかな下り坂になっています。タイヤのスリップコーンが消えない交差点での大きいドーンという音に振り返って見ると信号無視の軽自動車が横転するところでした。気持ちが少し動転しましたが、すぐに学校の事務所に行き、事故の報告と警察、救急車の手配のお願いを済ませ、事故の現場に戻りました。

横転した車内で男性が宙づりになっていたの、割れた後ろの窓から車内に入り、シートベルトを外しました。気が張っていたのでしょう、男性を車の外に引き上げる時に自分の腕を切ったようで、痛みがありました。

その後、警察の事故係の車と救急車が到着してホッとしました。

現場検証にも立ち会いました。全員が軽傷であるとの事で安心しました。事故を目撃して、事故の怖さを感じるころです。今、自動車学校に通っている者として、いかに安全運転が大事か良くわかりました。免許を取ったら事故ゼロで安全運転を誓います。

祖父曰く、「幼少期の頃は花火の音に怯えて泣いて家まで帰ってくる臆病者が、世の中で困っている人、弱い人の手助けになって嬉しい。これからもあたたかく手助けを惜しまなくするように」

第51回社会貢献者表彰式に参加できたことを肝に銘ずるよう心掛けいたします。

人命救助の功績8件、社会貢献が32件、それ以外に多数の団体個人の方々がおられます。その人たちのためにもおごらず、頑張ってます。





## 竹澤 匠平



福岡県

2017年5月27日、福岡県鞍手郡鞍手町の浮州池で釣りのポイントを探していると、池の対岸で犬が泳いでいるのが見え、不思議に思っていたところ、その横で溺れているらしき人を発見。大きな池でかなり距離があったが、竹澤さんは柵を乗り越えて対岸まで走った。現場につくと女性が「主人が溺れている、助けて！」という。既に男性は手先を残して沈みかけていたため、竹澤さんは着衣のまま池に飛び込み男性を確保した。しかし、池は水深5m以上あって足も着かず、水面から1.5mの急斜面のコンクリート壁を自力で上がることはできず救助隊の到着を待つしかなかった。救助までの約20分強、男性の妻が手すりをつかまりながら差し出した足に、男性をつかまらせ、同時に竹澤さんは立ち泳ぎをしながら、壁からわずかに出ている排水パイプをつかんで男性を押し上げたが、力の限界が近づき、もう自分もダメか、と思ったが最後の力を振り絞り、必死で支えて救助を待ち続け、ようやく消防隊の救助が到着した。男性は無事に救助され、その騒ぎで駆けつけた釣り人が差し出した竿につかまりながら、竹澤さんも自力で岸へ這いあがった。救助された男性はしばらく入院していたが、その後回復し復帰している。

今回、経験したことのない名誉な表彰をしていただき、社会貢献支援財団に心から感謝申し上げます。

昨年、消防署から表彰をいただいた際に、社会貢献支援財団という財団法人があることを教えていただき、雑誌などに掲載される感じなのだと思っていました。それから数か月後に、財団からお電話をいただき、とても光栄な賞を頂けることを実感しました。

受賞決定の通知をいただき、手続きを済ませ、東京都の帝国ホテルにお招きいただき、チェックインを済ませ、父親と二人で下町の飲食店を沢山回りました。

翌日、表彰式典、祝賀会を迎え、父親と着慣れないスーツを着て出席させていただきました。

式典でのリハーサルは初めての経験で緊張しながら終わりました。係員の方の優しい対応のおかげで立ち位置など分かりやすく、気持ちが楽になりました。

表彰式典は安倍会長の挨拶から始まり、選考委員の紹介、人命救助の受賞者、社会貢献功績者の紹介、表彰状の贈呈などがありました。

今回の表彰式に参加させていただき、私は社会貢献功績者や人命救助をされた方々の行動力、活動力の凄さに驚きました。

そして祝賀会が始まり、賑やかな雰囲気の中で沢山の受賞者の方々とお話をしたり、とても美味しい食事やお酒を頂き、素晴らしい会になりました。皆さまにまた会える日を楽しみに思い、東京を後にしました。

人命救助の内容につきましては式典にて紹介された通り、2017年5月27日午前10時頃、釣りポイントを探していると、池の対岸で犬が泳いでいるのが見え、不思議に思っていた所、その隣で溺れている方を発見し、足がつかない池で男性を救助が来るまでの約20分間支え続けました。今、当時のことを振り返ってみると、とても怖いことだなと痛感します。

今回の救助内容で素晴らしい賞をいただきましたが、このような危険なことが世の中から少しでも減っていく事を心から望んでおります。

今回は素晴らしく光栄な賞をいただきありがとうございました。



▲浮州池



▲事故現場にて



▲水中から男性を支え続けた

**溺れた人を救助  
会社員に感謝状**  
直方・鞍手消防本郡  
直方・鞍手広域市町  
村園事務組合消防本郡  
は、池で溺れた人を助  
けた福智町赤池、会社  
員、竹沢匠平さん(19)  
に感謝状を贈った。

竹沢さんは5月27日、釣りに訪れた鞍手町木月の浮州池の岸から約2層の所で、50代男性が溺れているのに気付いた。池に飛び込み、救助しようとしたが、水面から高さ約1・5層の急傾斜のコンクリート壁の岸を自力で上がることができなかった。このため、救急隊が到着するまで約20分間、男性の妻が岸から差し出した足を男性につかまらせ、同時に、竹沢さんは壁からわずかに出ているパイプをつかんで、男性を自分の体で支え続けたという。

男性は、夫婦で犬數匹を散歩させていたが、1匹が池に入ったため助けようとしたらしい。竹沢さんは「男性が手先を残して沈んでいたので、最後の手段と思い飛び込んだ。パイプをつかんだ手がきつくなって、何度か死ぬ思いをしたが、助かってよかった」と話した。【武内靖広】



溺れた男性を助けて感謝状を贈られた竹沢さん

## 池田 光広／池田 結人／池田 恵菜



## 熊本県

池田光広さん、結人さん、恵菜さんの親父は、海水浴を楽しんだ後、釣りをして帰ろうと隣の大手原漁港に場所を移し準備していたところ、ドーンと音がしたので振り返ると、45m先に白い乗用車が海面に浮いていた。

直ぐに光広さん、恵菜さんが駆け付けると車の中で茫然とする老夫婦の姿があり、車は見る見るうちに海底に沈んでいく。結人さんが緊急の際の連絡役として監視、2人が窓ガラスを割る物を探していると、運転していた男性が脱出し海面まで上がってきたが溺れた為、光広さんは着衣のまま海に飛び込み、79歳男性を岸まで運び上げた。助手席の女性は沈んだままだった為、車に潜ると、運転席の半分空いた窓から、75歳の妻が上半身出し挟まった状態で意識がなかったことから、海中で引っ張り出し岸まで運び無事救助した。老夫婦の車は、バックで方向転換をしようとしたところ、地続きと勘違いし海に転落した模様。池田さん家族がそこにいなければ、間違いなく2人とも助からなかったと思われ、3名の連携で2つの命が救われた。

(推薦者：公益財団法人警察協会)

この度、このような素晴らしい式典に参加させていただき、私たち家族にとって一生忘れることの出来ない思い出となり、心より感謝しております。

救助したあの日、7月17日は息子の誕生日でもありしっかり覚えています。

海水浴をした後、釣りでもして帰ろうという話になり、港の防波堤の先端で準備をしている時のことでした。ドーンと大きな音がしましたので船同士の事故かと思い、後ろを振り返ると海に車が浮かんでいました。息子にはその場で見ているように頼み、娘と2人で車のそばへ急いで向かいました。

音で近所の方が来られましたので110番と119番を頼み、沈んでいく車を横目で見ながら何も出来ずふたりでバタバタと走り回っていると、沈んだ車から男性が1人海面に上がってきましたが溺れている状態でした。考える間もなく海に飛び込み岸壁まで連れて行き、もう1人乗っていらしたので再び潜り、窓に上半身出して動けなくなっていた女性を抱きかかえて陸地まで泳ぎ、救助することが出来ました。

近所の方の連絡で間もなく救急隊、警察、ドクターヘリが到着しました。応急処置が行われている間に状況説明を行い、私たち3人は家に帰りました。帰りの車中「何

も無くてよかった」「2人はちゃんと助かった?」「ドクターヘリはじめて見たね」などいろいろ話をしながら帰りました。

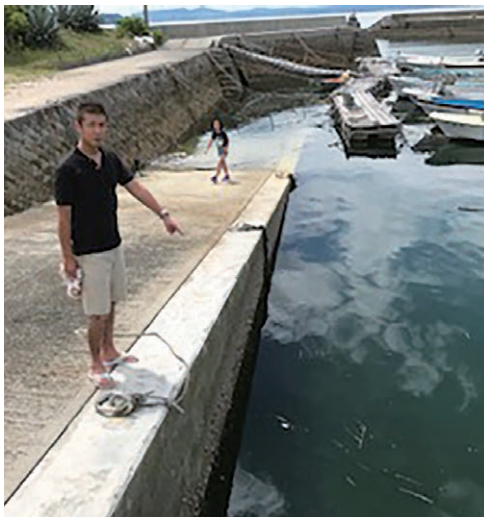
後日、警察の方から連絡があるまでは私たちが救助した人たちが助かったのか、救助が遅かったのか、とても気になっていましたので、おふたりとも命に別状ないと聞いたときにはホッとしたのと助かってよかったと思いました。

熊本県警本部長より感謝状を頂きましたが、まさか東京で式典に出席する事になるとは思いもよらず、安倍会長はじめ受賞者の方々の貴重なお話を聞くことが出来、人生経験の1つどころではなく私たち家族の大きな財産となりました。

最後になりましたが社会貢献支援財団の皆様、関係者の皆様、また推薦いただいた警察協会の皆様、本当にありがとうございました。これからの皆様の更なるご発展を祈念しております。



▲光広さんは服を着たままとび込んで救助に向った



▲車が転落した現場



▲親子でピース

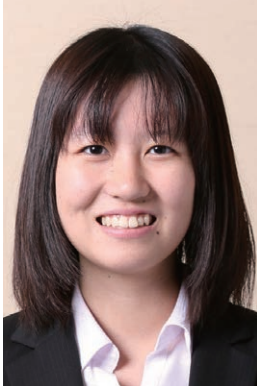


# 社会貢献の功績

---

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧、幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績

## 早大防災教育支援会 (WASEND)



代表  
有西 希海

東京都

早稲田大学社会環境工学科の教授だった濱田政則氏は、2004年に発生したインドネシア・スマトラ島沖地震の震災後現地を視察に訪れた際、ひとりの少女から「日本は昔から地震の被害を受けていたのに、その経験をなぜ私たちに伝えてくれなかったのか」と質問を投げかけられたことで、学生による防災教育の必要性を強く感じ、「早大防災教育支援会」(WASEND)を設立した。

濱田氏の意志は学生たちに受け継がれ、現在約60人のメンバーが日本国内のみならず、インドネシア、フィリピンの子どもたちを対象に防災に関する教育活動を行っている。

現地の大学生や専門家との綿密な現地調査の上、その地域に適した授業を、実験装置を用いて体験的な内容にし、子どもたちの防災への意識向上を目指して行っている。

学生が作る防災シリーズ絵本「よしはまおきらい物語」(英訳・インドネシア語訳もある)を編集。また、この夏にはシリーズ第2弾「ぼくはひとりじゃない」を編集。授業を受けた子どもたちに手渡ししている。

(推薦者：尾島 俊雄)

この度は早大防災教育支援会 WASEND を社会貢献者団体として表彰していただき、誠にありがとうございます。団体の代表として感謝申し上げます。

WASEND は早稲田大学の社会環境工学科の学生が中心となって、小学生を対象に防災教育活動を行っている団体です。日本国内のみならず、インドネシアやフィリピンなど海外にも足を運び、それぞれの地域に適した防災授業を実施しております。

当団体が発足したきっかけは2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震です。この地震は震源地周辺だけでなく、広範囲にわたって甚大な被害をもたらしました。当時、早稲田大学社会環境工学科の教授であった濱田政則先生(現アジア防災センター長)は、震災後に現地を視察した際、一人の少女から「日本は昔から地震の被害を受けていたのに、なぜその経験を私たちに伝えてくれなかったの」という言葉を受けました。この言葉で濱田先生は若年層への防災教育の必要性を認識し、WASEND を設立します。

国内の活動としては、小学校を訪問して防災についての授業を行います。都心部では首都直下地震に関する内容、瀬戸内近郊であれば南海トラフに関する内容など、それぞれの地域にふさわしい授業を行っております。このほか、地域の防災フェスに参加するなどして、地域の皆様の「防災」意識を少しでも高められるように活動しております。

海外活動としては、主にインドネシアとフィリピンに遠征して小学生への防災教育や大学生とのディスカッションを行っております。インドネシアでは2004年の地震によって被害を受けたアチェをはじめ、メダン・ジョグジャカルタ・バリなどで毎年活

動しております。フィリピンは昨年本格的にスタートした活動で、台風が多いフィリピンの地で台風と土砂崩れに関する講座を中心に行いました。

また、WASENDでは防災絵本も制作しており、これまでに「よしはまおきらい物語」「ぼくはひとりじゃない ～ワビュー君と、アチェをおそった大津波～」の2冊を発刊しました。日本語／英語版とインドネシア語版の2種類を用意し、国内外の小学生に配布しております。

最後になりますが、今回授賞式に参加できたことを大変光栄に存じます。様々な活動をしている方や団体と出会えたことは私たちにとって非常に良い機会となりました。改めて、WASENDを推薦してくださった尾島俊雄先生をはじめ、支援して下さる国境なき技師団の方々、今までWASENDを創り上げてきた歴代の先輩方に深く感謝申し上げます。

代表 有西 希海



▲WASEND 編集の絵本を持つ小学生達と記念写真



▲絵本を読む子ども



▲インドネシアの講座風景



▲国内での講座風景



▲大アチェ県知事への絵本紹介



## 特定非営利活動法人チェンジングライフ



大阪府

理事長の野田氏は、自身が少年時代に非行を繰り返し、少年院に収監される経験を持つ。院内でキリスト教に目覚め、退院後に聖書学院で学ぶと、東大阪市内にアドラムキリスト教会を設立し、更生を願いながらも、住居や信頼できる大人を喪失している若者に寄り添い続け18年、これまでに100名を超える青少年らの自立更生に尽力してきた。チェンジングライフとは、社会復帰のための、生活支援、自立後のアフターケアを行うこと。

政府をはじめ、自治体が進める再犯防止への取組みにも積極的に参加し、兵庫県の少年院では教誨師（きょうかいし）として、少年らに寄り添い、また自身の体験や彼らの心のうち、再犯防止について、教育委員会の研修や弁護士会等での講演も週一度のペースで行っている。

（推薦者：特定非営利活動法人再非行防止サポートセンター愛知）

理事長

野田 詠氏

この度、社会貢献者表彰をいただき、まず、はじめに、社会貢献支援財団様に心から感謝を申し上げます。そして、この場をお借りして、恐縮ですが、法人の仲間とその家族、支援者の方々、また、同じ志をもって活動させていただいている友好・関係団体の皆様にも、感謝を申し上げます。

率直なところを申し上げて、受賞決定のお電話をいただいた時、『神様ありがとう！』と心の中で思わず、ガッツポーズを致しました。と同時に、身の引き締まる思いも致しました。それは、社会貢献者表彰の端に加えていただくことは私たち法人にとって何よりの励みでもあり、また、さらに目の前のサポートを必要とする人に愚直に寄り添っていこうという厳正な思いにさせられたからです。

私たちはNPO法人化するもっと前、草の根の更生支援の活動を2000年から開始しました。「いと小さき者の隣人になる」その聖書の教えを胸に、相談者の声に耳を傾けてまいりました。

その中には、見事、就職を果たした人、子育てに奮闘する良き母親になった人、家族のために必死で汗を流し家にお金を入れる良き父親になった人、塗装会社の社長になった人、そして、再び、犯罪に走ってしまった人…。その寄り添う日々は、喜びとともに、苦難の歴史でもありました。

そうして、それまで細々と続けてきた非行防止・薬物離脱等の相談支援を本格的に拡充させたのは、2011年でした。アパートを数室借り上げ、受刑者や出院者を迎え入れ、自立と更生の支援を本格化しました。その中で、逮捕経験を持ちながら、高校や大学に進学した若者たち、薬物の売人から足を洗い、当法人のスタッフになった若者…。司法や福祉の専門家から一般就労困難といわれながら、社会適応を果たした若者…。

思い返せば、泣き笑い、喜びと苦み、感謝と痛みが胸の内を交錯いたします。

更生支援の活動は、打てば響くような活動ではありません。どんな活動でもそうですが、使命がなければ、続けてこられませんでした。社会貢献支援財団様からの表彰を今後の活動の追い風として、「使命」いのちを使うに値する、誰かがしなければならぬ活動を継続していきたいと思っています。

最後になりますが、社会に貢献しようとする団体や個人は、ややもすれば、その地域、地域において、孤軍奮闘となっている場合もあるのではないのでしょうか。そういった個々の活動が、メディアで取り上げられることがあったとしても、その苦労が半減するわけではなく、かえって、困難やいらぬ誘惑が増す場合もあるように感じます。しかし、そういった社会貢献を志す者に、まるで、プールから上がった競泳選手にバスタオルを覆ってくれるコーチのように、そっと、寄り添ってくださり、「お疲れ様。あなた方の活動を応援しています。世界に少しでも笑顔の輪を広げて行きましょう」と身体の芯から温めて頂くような体験を私は社会貢献者表彰の式典でさせて頂いたように感じてなりません。このぬくもりを、更生支援、児童福祉という私たちのフィールドで、子どもたちに届けて行きます。本当にありがとうございました。

理事長 野田 詠氏



▲表彰式典にて



▲表彰式典にて

## 認定 NPO 法人高知こどもの図書館



理事長  
大谷 英二

高知県

日本で初めて NPO 法人が設立し運営する図書館として1999年に開館した認定 NPO 法人高知こどもの図書館は、子どもたちと本が出会える場として、児童文学・研究書・絵本・美術書・小説・ノンフィクション等3万6千冊の蔵書を保有する。来館者は年間約1万5千人にのぼり、毎月のおはなし会や、地元の音楽家によるコンサート、折り紙教室、赤ちゃんの本紹介の催しなど、本の貸し出し以外にも様々なイベントを開催し、子どもたちが安心して人と出会い、本と出会える場所を提供するとともに、子どもから大人まで誰でも利用できる公共の施設として、地域の人々に親しまれている。

自治体の協力も得ているが、指定管理などではなく、運営費は全て自分たちで賄っている。ボランティアとして係る協力者に恵まれ、間もなく設立20年を迎える施設は、支える人々により、子どもの想像力と創造力が育まれる場所として、地元の方々から期待されるとともに、全国からも注目を集めている。

(推薦者：古谷 滋子)

NPO 法人高知こどもの図書館は、子どもたちが安心して人と出会い、本と出会える場所を増やしたいとの願う大勢の方の思いが結実し、1999年12月に開館した日本で初めての NPO 法人が設立し運営する図書館です。

初めから、自分たちで運営する図書館の設立を目指していたわけではありません。きっかけは、1994年の秋に発表された高知県立図書館の移転・新築計画でした。「移転後の建物を県立のこどもの図書館にして欲しい」と県に申し入れをしたのが活動の始まりです。

その後、紆余曲折があり、1998年春、高知県健康福祉部長より「運営費の補助はできないが、皆さんで責任を持って運営する覚悟があれば、県有施設を無償で貸与できる」との連絡があり、県立こどもの図書館ではなく、自分たちで作って運営する民間の図書館へと発想・活動が大きく変化することになりました。

蔵書整備など1年間の準備期間を経て、1999年に開館。当初1万8千冊でスタートした蔵書は、現在3万6千冊になりました。1Fは閲覧室、2Fは企画展やコンサートを行う多目的スペースと研究資料コーナー、それに小さなギャラリースペースがあります。年間約1万5千人の来館者があり、3万冊前後を貸出しています。開館からの累計では貸出冊数は50万冊をこえ、来館者は30万人近くになりました。

図書の閲覧や貸出し、ブックトークや読み聞かせ、読書相談への対応といった図書館業務のほか、多目的スペースやギャラリースペースでは年間20企画前後の企画展を実施しています。また、県内の音楽家の方による「本とともにだちコンサート」は開館以来、年4回行っていますが、小さな子どもたちが気軽に本格的な音楽を楽しめる場として親しまれています。

「こどもの読書活動ボランティア養成講座」、「ストーリーテリング研修会」、「子ども司書講座」など、年間約70件前後の講師活動をおこなっています。ですがどれも図書館としては当たり前の本当に地味な活動です。他の受賞者の皆様の活動に比べるとささやかなことしかできておらず、皆様と肩を並べて受賞者です、と名乗るのが申し訳ないように感じております。

ただ、今回とても嬉しく思ったのは、この賞に推薦下さったのが図書館設立当初からの会員であり、利用者としてずっとこどもの図書館を見守って下さった方だったことです。市民参画型の民間の図書館を励ましてくださり、また時には厳しいご助言をくださりながら、図書館を育てていただきました。大勢の方のお力添えがあったからこそこの受賞です。今回の賞の本当の受賞者はこの19年間支え続けてくださり、図書館に関わって下さった方たちです。お一人お一人の思いや共に歩んできた日々の活動を表彰いただいたのだと思います。

賞に恥じないよう、子どもたちに本を届ける仕事を続けて参りたいと思います。どうか今後ともよろしく願いいたします。

館長 古川 佳代子



▲図書館外観



▲おはなし会



▲企画展会場風景



▲コンサート風景（馬頭琴）

## 牧野 博子



大阪府

それまで里親となる人が全くいなかった大阪府門真市で自身が1996年に里親第一号となり、1歳の男児を迎え子育てをしながら大阪府里親会の副会長や、里親・里子、関係者によるマラソン大会“はぐくみ Run フェスタ”実行委員会委員長として活躍。

ご自身が里親として得た様々な経験を通じて、里親制度の発展、児童福祉の増進、里親の資質向上に活かしたいと活動を続けている。

現在は、里親で構成される里親会のメンバーだけでは、到底他の親御さんのケアまで十分に出来ない現状を危惧し、単に里親を増やすだけでなく、専門的に里親をサポートする機関の必要性を訴え、支援機関プロジェクト会議を立ち上げ、リーダーとして全国で里親・里子が抱える問題に対応するべく尽力されている。

(推薦者：門真市立市民公益活動支援センター)

### 「受賞して、振り返って」

この度は誠にありがとうございました。授賞式で名前を呼ばれるまでの緊張した時間に頭をよぎっていたことを記して感謝と感想に致します。

小学生ぐらいの子供のころ、大きくなったら、好きな人が出来て、結婚して、なんとなく子どもをふたりぐらい生んで、楽しい家庭を作るんだにろうなあ、と思っていました。

そして大人になり、20代で恋をしてすぐに結婚しました。ここまでは子どもの頃の思いのままでした。数年経ちました。子どもはできません。仕事を理由にしました。その後不妊治療に夫婦で苦しんだ末、結婚10年目養子里親になる決断をしたのです。やがてかわいい1歳の息子との出会で子どもの頃の夢に変則ではありますが追いついて幸せになりました。

ただ、この事が私に次々と大きな問題に気付かせてくれたのです。息子と出会ったのは大きな施設内の乳児院でした。当初息子との親子関係を早く構築するのに夢中で、周りの子どもたちのことは気にならなかったのですが、日を追うごとにそれは変わりました。多くの乳児たちが、そして気づけばその施設には数百人の児童が暮らしていました。日本の現実を知ったのです。

今日、虐待やその他の事情で実親と暮らせない児童は45,000人。この数字は一向に減りません。少子化が問題になっている昨今でさえ、保護される子どもは増加の一途。児童相談所の手が足りないことは皆様承知のことです。

その45,000人の子どもは、ほとんどが乳児院と養護施設に保護される、日本の社会的養護の現状を目の当たりにしたのです。

つまり家庭を知らない子どもたちを日本は作り出しているともいえるのです。諸外

国と比較しても異常なことなのです。里親をどんどん増やさなければ！そう決意しました。

時同じくして、息子が小児てんかんだと判明。元々体の弱い子で様々な病気にかかりますが、この時は心がおれました。後にてんかんの病気治療で始めたマラソンのおかげで息子は健康を勝ち取ります。

社会的養護の大きな問題点とマラソンは不思議なつながりとなって、多くの仲間とマラソン大会を開催することになりました。マラソンでのPRは7年。響きあう仲間は今ではオーケストラのように美しいハーモニーを高らかに奏しています。

おかげさまでここ数年は里親登録件数が増えてきており、国も社会的養護は里親中心へと舵を切りました。

授賞式にも参加した23歳の養子の息子が言います。「養子や里子が普通のことになるような社会になってほしい」と。

乳児院で息子と仲の良かったあの子はどうしているのでしょうか。養護施設の子どもたちはどうしているのでしょうか。家庭的な環境で育ったのか？ 思いを馳せます。



▲マラソン大会“はぐくみRun フェスタ”で里親制度をPR

## 岩田 亮子



### カンボジア

客室乗務員として勤務しながら国際貢献がしたいとキャリアを積んでいた。2009年にカンボジアに移住し、人身売買の撲滅活動を支援していた縁でバタンバン州の児童養護施設「ホープ・オブ・チルドレン」でボランティア勤務することとなった。当時施設の状況は酷く、岩田さんは衛生状態を改善しようと生活用水の水質浄化から着手。食料は差し入れ頼みだったため、稲作を始めた。子どもたちが自分のご飯を作る、家を建てる、修理する、お米を作るといったことができ最低限の生きるすべを養っていけるようにしている。

2015年に無農薬の野菜で作った料理を出す CAFE HOC をオープン。孤児院で育った子どもたちが野菜を育て、店で調理、サービスはもちろん運営もしている。このカフェから子どもたちが自立して巣立っていけることを願っている。  
(推薦者：高山 良二)

この度は私の不器用な支援活動に過大な評価を頂き、心よりお礼申し上げます。

式典当日、由緒ある帝国ホテルの大広間で諸先輩方の長年の素晴らしい活動報告を伺うにつれ、正直消え入りたい気持ちにもなりました。身に余る光栄と思っております。

草の根の活動とはいえ、私がこうして活動を続けることができましたのも多くの心ある人々の支えや応援があったからにはほかなりません。

そうした皆様に立ち会って頂き、共にこの度の受賞ができましたことはこの上なく幸せて大変嬉しく思っております。分不相応の受賞にも思えますが、支えて下さった皆様への恩返しと、今後の活動への大きなインセンティブともなりました。改めて感謝申し上げます。

私がカンボジアを選んだ理由は、アジアの同胞でありながらその実態をあまりに知らないということや戦後これだけの年月が経過しているにも拘わらず何故未だに支援を必要とする国なのだろう何が起きているのか知りたいという好奇心からでした。

およそ40年前クメールルージュで多くの指導者、教育者、医者、法律家から僧侶と言ったいわば国のブレインを失ったカンボジアで今この国を支えているのは、その付けを背負った人々であります。そして国民の半数はその戦争さえも知らない若い世代だという現実。

そのため人材育成は急務でした。しかし教育者、指導者は一朝一夕には作られはしません。

一方、子どもたちの成長は待ったなし、子どもたちの成長に歯止めはかけられません。教育者が育つ前に子どもたちが成長してしまい、十分な教育を受けていない人々がまたこの国を支えていなくてはならない状況が今のカンボジアです。

産業も不足しており、毎年続々と社会人が誕生してもその受け皿がない状況です。

私は片田舎の小さな孤児院（Hope Of Children 略して HOC）で、孤児院自体と子どもたちの自立支援をしています。最初の4年（フェーズ1）は子どもたちの命を守るための「水の浄化」や「自給自足」といった活動でした。続く2年（フェーズ2）は、寄付に頼らず孤児院自体が自立するための活動で、働いた経験のない村の女性たちを訓練し縫製工房を立ち上げ、孤児院の運営を補っていました。スポンサーの他界で廃業し、3年前に代わりに始めたのが孤児院で採れた作物を提供するカフェ「CAFE HOC」で、子どもたち自身が切り盛りしています。CAFE HOCが社会との接点であり子どもたちにとっては訓練の場でもあります。その収益で孤児院を運営するためと、CAFE HOCを踏み台にして一人でも二人でも自分の足で立ち、巣立っていく若者を輩出すると言う子どもたち自身の自立（フェーズ3）を目指しています。お陰様で今年第1号が巣立って行きました。

また、特殊技能や更にも上の高等教育を学びたいという意欲と熱意がある子どもたちを日本へ送り出したりもしています。

こうして巣立った卒業生たちがまた後に続く後輩たちを引っ張って育てていくという良い連鎖が起きることを夢見て、『支援を必要としなくなるための支援』を命の続く限り続けて参りたいと思っております。ありがとうございました。



▲ CAFE-HOC は子どもたちが運営



▲ 子どもたちと





## むつみ日本語学校



代表理事  
檜尾 睦

カンボジア

岡山県の中学校に勤務していた檜尾睦氏は日本語教師の資格を取得し、所属していたNPO法人から派遣され、2000年にカンボジア・シェムリアップ州のチェイ小学校で日本語教室を開講し、およそ1,000人（2015年1月末まで）の子どもたちに日本語や日本の文化などを教えた。派遣を終えて2015年に、自らNPO法人日本・カンボジア教育支援協会を立ち上げて、シェムリアップ州の「公立大正小・中学校」内に新たに「むつみ日本語学校」を開校した。現在小学校3年生から高校3年生までを対象に、カンボジア人教師1名と共に無償で日本語を教えている。

授業は平日の午前と午後（月曜から金曜まで）に二部制で実施し、それぞれ約30名の子どもたちが熱心に学んでいる。授業では日常会話の練習に力を入れており、その他、かるたやこま回し等の日本の遊びや絵本の読み聴かせ、日本の歌などを取り入れている。年間を通して現地への参観希望者や岡山市内の小・中・高等学校とも交流し、特に中・高等学校の生徒約70名が、毎年カンボジアを訪問し現地交流を深めている。

2015年～16年度は中学生3名が来日し、岡山市内で3週間のショートステイを体験。来日した3名の中学生は、それぞれ日本語だけでなく、日本の学校生活やホームステイによる家庭生活を経験し、帰国後は具体的な目標をもって「むつみ日本語学校」のリーダーとして活躍している。

2016年度からは、毎年日本の高等学校への長期留学も実現している。子どもたちが1年間の長期留学を終えて現地の高校を卒業した後の自立のための支援、日本語の習得を生かした就労に向けた支援も計画中である。（推薦者：棚橋 知子）

この度の受賞は私の人生にとって大きな忘れられない嬉しい出来事となりました。

ひとつは、NPOを立ち上げた時から活動を共にしている事務局長と一緒に帝国ホテル東京で受賞式に参加し、これまでの私たちの活動が認められた喜びを共有できたことです。

もうひとつは受賞式に参加させていただいたことで、日本の国内外で素晴らしい社会貢献活動をされている方々と親密にお話することができたことです。受賞式に参加できていなかったら、このような活動をされていることを知ることもなかったと思います。

特に事務局のある岡山の地で活動されている「NPO法人おかやま入居支援センター」の方々や「むつみ日本語学校」がある同じカンボジアの地で活動されている岩田亮子さんと知り合うことができ本当に良かったと思っています。これからは他の団体ともつながりを持ちながら活動していきたいと素直に思いました。

カンボジアに帰ってすぐに、この受賞の感動を「むつみ日本語学校」の生徒達にも知らせました。お土産の日本のお菓子でお祝いもしました。生徒たちは目をキラキラさせて私の話を聞いてくれました。

ところで、「むつみ日本語学校」の運営母体であるNPO法人日本・カンボジア教育支援協会も今年で4年目を迎えました。この4年間で、現地で雇用しているカンボ

ジア人の日本語教師が結婚出産を経たお蔭で、子育てしながらでも働きやすい環境を整備することができました。日本語教師を目指して彼女に続こうとする生徒たちのためにも有難いことだと思っています。

また、社会状況も大きく変わり、2000年にカンボジアに渡った時と今では子どもたちを取り巻く状況が異なっています。当初は、貧しい子ども達が日本語を習得することで、ガイドやホテルなど現地での就労に役立つと考えていましたが、むしろ日本語を生かして、日本に就労先を求めるケースも出ています。子どもたちの将来を見据えた支援を考えなくてはならなくなりました。今はNPO法人の規模や財源の関係で長期留学は1年間ですが、将来を考えると高校3年間、大学までというように、長期の留学も考えていかなければなりません。日本語をしっかりと勉強したことが、子どもたちの就労に大きく役に立ち、やがてはカンボジアの国を支える大人になってくれることを願ってこれからも活動を続けていきたいと思っています。

代表理事 檜尾 睦



▲新校舎に看板設置



▲新校舎の外掃除



▲授業風景（あやとり）



▲授業風景（かるた）



▲日本の中学生との交流

## 認定 NPO 法人こどもの里



理事長  
荳保 共子

大阪府

日雇い労働者の街、釜ヶ崎の子どもたちに、安心・自由・健全な遊び場を提供しようと、1997年にスタートさせたミニ児童館が起源。訪れる子どもからは、背景にある困難な家庭環境が見えてきたことから、様々なサポート体制を整えてきた。こどもの里は、遊びを中心に生活習慣やいのちの大切さを学ぶ場であり、またこどもの家族の緊急避難場所や、生活相談の場でもあり、里親・ファミリーホーム、自立援助ホームなど社会的養護の場でもある。

毎週末にはボランティアの助けを得て、様々なイベントが開催されている。2016年には「さとにきたらええやん」で映画化された。また、日雇い労働者の街・釜ヶ崎が、日本の高度成長や金融危機、行政に翻弄されてきた歴史を、子どもたちが学び、路上生活を続ける人に、毛布・おにぎり・お味噌汁等を配りながら声掛けをすることも夜回りは、毎年1月～3月まで毎週のように開催されている。こどもの里以外にも、全国から子どもたちが集まり、学習会に続きグループに分かれて夜回りを行うが、これまで35年にわたり開催されている。この学習会を通じて、命の尊さと差別や偏見について学び、路上生活を余儀なくされている人々に心を寄せる機会となっている。

こどもの里には二つの大きな信念がある。一つは、こどもの最善の利益を考えること。もう一つは、こどもの自己肯定感を守り育てること。この二つの信念のもと、活動をしている。

一般的に「西成・釜ヶ崎」は怖い所らしい。しかし私は釜ヶ崎に来て50年、怖いと思った事が無い。それどころか、こんなに人間らしい街、こんなに暖かい街は他地域には無いと思っている。

そんな街に生きる子どもたちはと言えば、実に子どもらしい。実に澄んだ目をしている。その目の輝きに圧倒された。出会った子どもたちには、凄いな「力」があった。感じる力、個性の力、人と繋がろうとする力、降りかかってきた問題を解決しようとする力、外からの抑圧を跳ね返してしまう力（レジリアンシー）、傷つけられた自分を慰め、癒す力、親を慕う力など。これらが「子どものもつ力」、「生きる力」。この子たちの生活・生き様にはハングリーさがある。言い換えれば、「心を使って」生きている。ここには「家庭」は無いけれど「家族」がしっかりある。

この釜ヶ崎の子どもたちを中心に「子ども夜まわり」なるものを、1986年度から毎冬行っている。「火の用心」の夜回りではない。道端で、ビルの軒下で野宿する人たちを訪問する夜まわりだ。道端で冷たくなっている人と出遭った。年間、釜ヶ崎に500人も行路死者がいる。「一人の人も死なないで一緒に暖かい春を迎えたい」を合言葉に、野宿せざるをえない人の命を守るのが目的だ。野宿者に対する偏見と差別に、子どもらの力で抗する。夜まわりなんかしなくてもいい社会にしたいと。

この夜まわり活動で、私たち大人が想像もしなかった「子どもの力」に出会った。野宿者への関わり方である。路上で寝ている人を見つけると、何のためらいも無く、

「こんばんは。体大丈夫ですか？」と駆け寄り声をかける。「ありがとう。大丈夫やで。あんたらこそ風邪引きなや」とおじさんたち。大人には到底出来ない業である。子どもたちのこの自然で無垢な「人と繋がろうとする力」は、野宿者からの最高の褒め言葉「ありがとう」をいっぱい浴びて、傷ついた子どもの心につつと他者へのいたわり・心配の心が息吹き、それが自分自身への愛しさと自信を息吹かせる。一方、野宿者と言え、寂しく怯えながらいる寝床に子どもらの訪問を受け、「これで明日もまた頑張れるわ」と生きる気力を取り戻す。夜まわりでの子どもと野宿者との出会いは、お互いがエンパワメントされあう関係を生み出している。

この「子ども夜回り」に安倍会長も3回参加され、子どもらと野宿者に声をかけられている。今回の受賞は、この子どもたちへのものだと私は理解させていただいた。感謝のうちに。

理事長 莊保 共子



▲料理クラブ風景



▲3月31日なんでもパーティー



▲6月田植え



▲キャンプ風景



▲こども夜回り

## 若松地区町会連絡協議会「若松地域給食ボランティア」



代表  
小林 真弓

北海道

平成元年に北海道岩見沢市社会福祉協議会より委託を受け、給食センターからお弁当を取り寄せて独居老人宅に宅配したのが活動の始まり。1年後には、自分達の手作り弁当を届けはじめ、現在では地域内の独居老人宅135件の約3分の1にあたる45世帯余りに届けている。町会の助成や、ボランティア仲間からの食材の差し入れなども利用し、300円という安価で30年間値上げすることなく続けている。会員は民生委員、保健推進員、ボランティアを含む14名。毎回次の月の献立を考え、材料と買い出しの量の割り出し作業を行い、買い出し、調理、車や徒歩での配達までを会員たちで行う。また、ひな祭りやクリスマスなどのイベントがある月にはそうした要素も取り入れて、お弁当の包みにも一言言葉を添えるなど、ただお弁当を届けるだけでなく、気持ちや愛情をもって独居老人に寄り添い、配達の際に安否確認や様子をうかがうなどの役割も果たしている。一人では調理しない老人も多く、皆このお弁当を毎月心待ちにしている。また、第2、第4水曜には、地域の介護老人を若松会館に車で送迎し、昼食を用意し、歌やゲームを楽しんでもらい、在宅介護する家族の負担を軽くするための活動も行っており、活動が認められて、2017年には北海道社会貢献賞も受賞している。

(推薦者：社会福祉法人 岩見沢市社会福祉協議会)

この度の公益財団法人社会貢献支援財団による、第51回社会貢献者表彰式において栄誉ある表彰を賜りましたことに心よりお礼を申し上げます。

国内・外でこんなに多種多様なすばらしい貢献をなさっている皆様と一緒に、帝国ホテルを会場に式典に参加できましたのは、財団の安倍昭恵会長をはじめ、選考委員の皆様、そして当日運営に係わっていただいた関係者の皆様のおかげと感謝しています。

前日の夕食会にはじまり、1分間スピーチ、受賞者懇談会では栃木県や熊本県から参加された方たちと楽しくお話でき、良い思い出となりました。

当日は広い会場と多くの人を前に緊張と感動に足も震えて壇上に。

安倍会長の優しい声が耳に残っていました。

すばらしい経験をさせていただきました。

私たち若松地域給食ボランティアは北海道岩見沢市の若松地域ふれあい推進協議会の給食事業として、平成元年10月よりはじまり、今年で30年になります。

「一人の不幸も見逃さない住みよい町づくり」を目標に若松地区に住居する一人暮らしのお年寄りにお弁当をお届けしています。

毎月第3水曜日朝8時30分若松会館の厨房にボランティアが集合。11時30分までに焼物、煮物、揚物など、色合いや匂いの野菜や果物、漬物と弁当箱一杯におかずを手作りし、炊き立てのご飯をそえて温かいうちにお届けできるように配達します。「給食です。お元気ですか…?」と安否確認と声をかけながら…。

その時の喜んでくださる姿や笑顔で「ありがとう。おいしかったよ」の言葉が私たちの頑張る活力にもなっています。

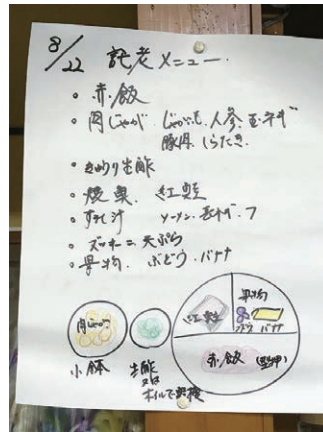
現在、民生委員、健康推進員、給食ボランティアの15人が調理や配膳、配達に活動しています。年代も80代から60代と様々ですが、皆さん忙しいけれど楽しみながら頑張っています。町内会の理解と応援ボランティアの協力がなければ続けられないと日々感じています。

今回、岩見沢社会福祉協議会の推薦をいただき、受賞できたことは、私たちボランティアにとって最高の荣誉とご褒美だと感じています。これからも受賞に恥じぬよう、利用者さんに喜ばれるよう「元気に！楽しく！」をモットーに頑張っ活動していきます。ありがとうございました。

代表 小林 真弓



▲お弁当の仕上げ中です



▲メニューを決める時は必ず絵に描いてみます



▲今月のお弁当ですよ



▲若松弁当フルーツ付き



▲おかずを詰める作業中です



▲お赤飯の日もあります

## 大谷 順子



福岡県

大学卒業後、放送分野で仕事をされていた大谷さんは、福岡子ども劇場の設立に参加したことがきっかけで、子どもの文化的な環境を整えるための活動を行う中、子どもとのふれあいを通じて、彼らの持つ悩みに心を寄せ、子どもの社会的環境がライフワークとなり、2001年には日本で2カ所目となる、子どもの電話相談、「チャイルドラインもしもしキモチ」を立ち上げる。

また、子どもを取り巻く問題に取り組む団体が協力することの必要性を訴え、ネットワークと交流を深める拠点として、「子ども NPO センター福岡」を発足させた。子どもに関する様々な人脈を持つ大谷さんに、行政から里親を普及させる為の協力要請があり、フォーラムなどを開いて広く里親の普及活動を行うと共に、世界の児童養護施設の見学など、情報収集を行い、日本では初めての施設となる、「SOS 子どもの村」を福岡に設立する為に尽力するなど、子ども分野の市民活動家として、子どもの社会的環境整備に取り組んでこられた。

(推薦者：坂本 雅子)

このたびの社会貢献者表彰の受賞はまことに光栄なことで、厚くお礼を申し上げます。

身の危険も顧みず人の救助に当たられた方々や、さまざまな困難を抱える人々に寄り添い支え続けてこられた方々、また海外にあって、人種、国籍を超えて困難にある人々のために身を挺してこられた方々と席を同じくして、この社会は、このような方々によって支えられているのだという感慨を強くし、身の引き締まる思いでございました。同時に、こういった方々に対して、スポットライトをあててこられた貴財団に敬意の念を覚えたところでした。

私自身をふり返りますと、今を生きる子どもたちを思い、夢中で走ってきた人生でしたが、申すまでもなく個人でできたことはひとつもなく、多くの子どもたちの苦難を目にして、動かないではいられない市民の連携のなかにありました。

日本の子どもたちの状況は、いま、7人に1人が貧困にあること、虐待の増加とともに親と暮らせない子どもの増加、自殺者の総数が減少する一方で19歳以下の子どもの自殺は増え続けているなど、看過できない状態があります。これに対して、子ども虐待防止、里親の普及と支援、青少年の自立支援、不登校の子ども支援・子どもの居場所・学習支援・子ども食堂、チャイルドライン、などなど、多くの市民が取り組んでいます。

私も、「子ども劇場」や「チャイルドライン」、「子どもとメディア」、「SOS 子どもの村 JAPAN」、「子ども NPO センター福岡」などの NPO の設立に関わり、多くの人々とともに活動してきました。その経験からも実感していますが、市民一人ひとりや

NPOの個別の頑張りでは限界があり、その声も社会に届きにくい状態があります。福岡では、20数年前からそれらの市民や団体のネットワークをつくり、県内に広げてきました。「子どもにやさしいまちづくりネットワーク」とよびます。子どもの権利尊重を基本理念として、子どもが大切にされる社会を、自分たちの住む自治体から実現していくために、市民のネットワークをつくり、行政とも連携していこうというものです。

子どもを取りまく環境には厳しいものがありますが、一方、少しずつでも、多くの方々の粘り強い努力によって明るい方に向かっていることを確信しています。そのことに希望を持ちながら、これからも力を尽くしていきたいと思っております。

この度の受賞は、いっそうの励ましをいただくものであったことに感謝申し上げます。



▲子どもの村の子どもたち



▲子どもの村の中庭で



▲毎年開催している市民フォーラム



▲2015年、市長がコーディネートする里親推進フォーラム



▲2018年、異分野の人々が議論するフォーラム



▲2018年、総会で報告



## 山口 和宏



埼玉県

18歳の時、重度の障がいを負い、24時間の介助を必要としているが、障がいを持つ人が支援を受けながらも社会参画して活躍し、楽しく人生を送れる社会づくりに挑戦している。2013年に自ら株式会社 LIFE クリエイトを設立し、「障がいを味方に社会イノベーションに挑戦しよう！」という精神のもと、24時間在宅介助派遣事業を行っている。

当事者である山口さんだからこそ目線で、利用者の意思を尊重したサービスを提供し、社会的自立を目指すステップアップのノウハウの提供が出来る。また、代表理事を2つの法人で務めている。一般社団法人日本障害者就労支援協会では、障がい者福祉サービスを行っている事業所が就労継続支援事業を始める際や、一般企業が障がいを持つ人を雇用する際に起こる困りごと（事務的な書類の手続きや勤怠管理、経営状況の把握、就労を希望する障がいを持つ人の適正判断やマッチング等）を、独自に開発したクラウドシステムを利用してもらうことで、サポートする事業を行っている。このシステムは60社以上の企業から利用されている。NPO 法人国際障がい者活躍社会創造協会では、障がい者の社会参画が理解を促進するため、地域や人が楽しく繋がる機会（車いすで行うハイキング、企業・団体と協力したイベント開催等）を定期的に創出している。

## 「社会貢献者表彰受賞式典を終えて」

私は18歳で交通事故に遭い生死の淵を彷徨い、命までは取り上げられませんでした。

当時は、命が中途半端にあることを悔い、最大の不幸なことであると考えた時期もありました。死の方がよっぽど楽なことだと感じていた時期が少なくとも3年くらい前まではあったと思います。

重度の障がいを負うということは、自分では何もできず、人様の手を借りることでしか生きることができません。「自分は社会のお荷物」だという声が頭からは離れることはありませんでした。五体満足で元気な頃は、生きるか死ぬか、まさか障がいという中途半端な苦しみの次元が存在することを全く知る余地はありませんでした。

3年前くらいから、「障がいがある」という理由だけで人生を諦めたくない、他人や社会に劣等感を持ちながら、すべて人や社会のせいにして生きたくない、という思いが強くなり、自分のできることから行動を始めました。

色々な方に支えていただきながら、時には、わがままだと言われても、傍から見たらそう思われるかもしれないと頭をよぎっても、自分が幸せでいることが、いずれ他人や社会に恩返しができる道であることを信じて今まで邁進してきました。それを周りで理解して、支えてくれる仲間たちがいたからこそ、今まで苦しくても歩んでこられたと感じております。

自分自身を満たし、支えてくれる仲間々に囲まれた環境がある今、今度は私が人様のためにお役に立つ番だとつくづく感じており、今回こういった栄えある賞をいただい

たことで私の信念や思い、描くビジョンがより一層強くなったことに大変ありがたく感じております。

関係者のみなさまにはこの場をお借りしまして、心より感謝申し上げます。

私自身はまだ道を歩き始めたばかり。人様のために何ができるのか試行錯誤の連続です。そして、少子高齢化が進む昨今、ヘルパー不足がとても深刻な状態であり、私の生活も日々危ぶまれ棧橋の上を歩いているような状況です。

また、世の中には障がいがあるという理由だけで、施設で囚人のような生活を虐げられ、自分の小さなやりたいこともできない、外の空気も自由に吸えない、そんな方々がいると思うと非常に心が痛みます。

これから残りの人生、障がいの有無にかかわらず、一人でも多くの方が自分の人生を決断する喜びを得られる、「真のユニバーサル社会実現」に向けて邁進していきたいと考えております。

私は、そのための仲間を求めています。もし少しでもご興味ご関心がある方はぜひご連絡いただけますと幸いです。同じビジョンを同志と共に創れること、楽しみにしております。

今回は貴重な機会をありがとうございました。



▲障がいがあってもなくても優しい社会を実現する事業アイデア・行動プランを手に入れる（神田氏と対談風景）



▲大人のユニバーサル林間学校\_NPO 法人国際障がい者活躍社会創造協会（集合写真）



▲おかれた場所で全力を尽くす（講演風景）



▲ネパール障害者団体交流\_NPO 法人国際障がい者活躍社会創造協会（障がい当事者ネパール国際交流勉強会）

## 更生保護法人栃木明德会



理事長  
石崎 常藏

栃木県

矯正施設出所者や保護観察中の女性で、頼るべき人がおらず、直ぐに自立更生することが困難な人たちに対し、一定期間、宿泊場所や食事を提供し、就労支援や社会復帰に必要な生活指導を行うなどしているが、全国でもこのような女性の更生保護施設は数少ない。創立110年と歴史も長く、途中建物をバリアフリー化し、高齢者や障害者の受け入れの特別処遇を行う施設として指定も受けている。薬物の指定施設でもあるため、覚せい剤の対象者の受け入れも多く、薬物治療を受けているものも多く、心のケアも含め、認知行動療法など薬物依存からの回復支援を実施している。

活動の中で、農作物を育て、収穫までを体験することで、心の癒しや達成感、自尊感情の回復に役立っている。また、地域協力者による野菜づくり委員会を立ち上げ、収穫した作物の販路を開拓し、自立支援金を支給するなどの自立支援にもつなげている。女性は男性に依存して生きてきて、就労経験が少ないケースも多いため、継続して就労するということが難しい。こうした入居者への声掛けや励ましは常に気をつけている。

フォローアップ事業として、自立後の元入居者を訪ねて様子をみたり、電話相談に応じたり、希望があれば生活相談等も続けている。

(推薦者：更生保護法人ウイズ広島／全国更生保護法人連盟／更生保護法人両全会)

### 表彰を受けて

この度、表彰を受け大変有難く感謝しております。

特に当会が記念すべき創立110周年を迎えた本年の受賞は、当会並びに役職員をはじめ日頃ご支援をいただいております関係者全員にとっても今後の活動に大いに力になります。

当会の沿革概略は「栃木囚獄」が明治6年1月開庁の栃木県庁舎内に設置され、同9年栃木囚獄改め「栃木監獄本署」が町内旭町に新築移転し、同17年「栃木分監」となり同39年11月、栃木分監が女子受刑者収容開始してから現在に至る女子専門の刑務所となり、当会は同41年1月5日、女子受刑者の免囚事業を目的にボランティア活動の父「平岩幸吉」の主唱により、町内仏教寺院の栃木仏教相愛会の住職たちと托鉢修行の浄財をもって栃木分監内で誕生した。その後同43年、「栃木保護会」に改称、その年に「下野保護会」と合併し、「下野保護会栃木女子部」となった。同45年と大正3年には、多くの町民の浄財により2棟の収容施設を作った。同10年、分離独立「下都賀保護会」となり、昭和8年10月、旭町より現在地神田町に施設を新築移転、同34年、更生保護会の経営が刑務所職員の兼務より民間人が行うことになり、その初代会長に近竜寺松涛住職が就任しました。

平成7年、本館新築、同8年、「更生保護法人」と変更になりました。この間、天皇誕生日御下賜金4回拝受、同19年、瀬戸山賞授与されました。

以上の通り当会の歴史の中で、はじめより町当局経済界多くの町民からの支援の伝

続があり、現在まで続いています。

現在の当会の取組みを紹介しますと、平成16年に心身両面の健康増進と社会適応能力の向上等を目的とする「セルフコントロールプログラム」を開始しました。さらに同25年指定の「薬物重点実施更生保護施設」としてスマーブ6を中心に取り組み、同28年指定の「指定更生保護施設」として施設のバリアフリー化工事を実施、さらにフォローアップ事業について数年前より実績を積み上げています。

最後に今回の受賞を機にさらなる保護事業の改善を図り安心安全な社会をつくるため積極的に挑戦を続けてまいります。

理事長 石崎 常藏



▲農作業 宮ネギ畑の草取り



▲薬物指導 セルフコントロールプログラム



▲玉ねぎの収穫作業



▲近隣の住職による法話



▲玄関先のバリアフリー工事を実施しました



▲更生保護女性会による食事会